

ひとりでできる、ひとつになれる（自立と共生）

義務教育の目的は、「自立」と集団生活を通して「社会性」を養うことにあります。今年度も「ひとりでできる、ひとつになれる」生徒の育成に取り組んでいきます。

一雁のV字編隊飛行

皆さんは冬になると遠くシベリアからやってくる雁という渡り鳥を知っていますか。雁の旅はとても長いので、みんなで助け合いながら編隊を組んで飛んでいます。



まず、体力のある雁が先頭を飛びます。その後先頭からV字の形になってみんなで飛んでいます。先頭の鳥が羽ばたくと、その後方には上昇気流が発生します。後ろにいる仲間たちは、その上昇気流を利用して、できるだけ体力を消費しないように飛びます。そして、先頭の雁が疲れたら後尾に回り、2番目の雁が先頭を受け持ちます。これを繰り返しながら飛ぶことで、一羽で飛ぶときよりも更に70%以上も遠くに飛ぶことができるのです。

また、雁はひたすら大きな声で鳴いて、先頭を飛んでいる雁を元気づけているといわれています。そして、旅の途中に一羽でも脱落する雁がいると、必ず二羽の雁が同行して最後まで見守り群れに戻ります。

雁の4,000kmにわたる遠い旅は、仲間との支え合いにより可能になるのです。

一ナイル川を渡るアリ

アフリカにナイル川という世界最長級の川があることは知っていると思います。その川幅の広いナイル川を渡って移動するアリがいるそうです。アリは泳ぐことができません。水面に浮くことはできても、やがて溺れてしまいます。では、どうやって渡るのでしょうか。

まず、約三千匹のアリが、一つの大きなかたまり（ボール）をつくります。そしてお互いにしっかりつながって、川に入るとアリのボールは浮きます。しかし、水面から出ているアリは、三分の一だけで、残りのアリは水の中です。このままでは、水中のアリ

は息ができずに死んでしまいます。そこで、水面上のアリが順番に水中に入り、その代わりに水中にいたアリが水面に浮かび上がるのです。この動きを繰り返しながら流されているうちに、どこかの岸に流れつきます。

そして、岸についたアリのボールは崩れて、またみんなで歩き始めます。このようにして三千匹のアリたちは、あの大きな川を、ほとんど犠牲を出さずに移動してしまうのです。

「置かれたところで咲きなさい」 *入学式の式辞から一部抜粋

今日から皆さんは、狭間中学校の生徒です。「置かれたところで咲きなさい」という言葉があるように、この狭間中の生活環境の中で、カ一杯咲いてほしいと思います。咲くというのは、自分が笑顔で幸せに生きるだけでなく、周囲の人々を幸せにすることで、自分の存在を証明するということです。人間は一人では生きられません。それは同時に、人の為^{ため}に尽くすことに喜びを感じるのが人間ということです。これから三年間、いろんな人と関わることで、自分の良さや価値を見つけてほしいと思います。

その為にはまずは「親は何もしてくれない」「友だちはわかってくれない」「先生も褒めてくれない」など、“くれない族”の自分と訣別することが大切です。

また、中学校生活では、どうしても咲けない時もあります。そんな時は無理に咲かなくてもいいのです。その代わり、タンポポのように根を下へ下へと降りして、深く根を張るのです。タンポポが、雨が降らなくても踏まれても簡単に枯れないのは、長い根っこが花を支えているからです。

そして、タンポポの花がやがて綿毛をつくって飛ばすように、皆さんも中学校生活で仲間を増やし、地域へも皆さんの良さが届けられる人になってほしいと思います。

にちにちこれこうにち
『日々是好日』という言葉があります。「毎日が良い日である」という意味です。誰でも「今日もよい日でありますように」と願います。しかし、現実はその願いの通りにはいきません。雨の日や風の日があるように様々な問題が起き、悩まされることもあるでしょう。「好日」は願って得られるものでも、待つて叶えられるものでもありません。どんな雨風があろうとも、好機と捉えて積極的に生きることで「日々を好日」にするということです。